
Non-...daily life

横山 龍也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Non - . . . daily life

【Nコード】

N9249Y

【作者名】

横山 龍也

【あらすじ】

ここは科学ではなく、魔法が発展した世界“セイルーン”
この世界では人間や動物の他にエルフや妖精などが住んでいる。

すべての生きる者には魔力が宿り、誰もが魔法を扱うことができる。

魔法には属性がある。

闇 光 氷 土 風 木 雷 水 火

の9属性がある。
だが、まだ確認はされていないが、全ての属性を扱える“無”属性もあると言われている。

そして、世界はこの“セイルーン”だけではない。

神や天使が住んでいる天界。

精霊がいる精霊界。

そして魔物や魔人が住む魔界がある。

そして人間界には昔魔王を倒したと言われている十の貴族、“十貴族”（ジュツキゾク）が存在する。

クライスト

ボルケーノ

ウンディーネ

ボルト

ルークス

アース

ルージュ

オプティカル

キルラント

マルタス

その十貴族を纏める王族“ローレンツ”

セイルーンはこの貴族たちによって均衡が保たれている。

一般的人間の魔力の平均値は1000程度であるが、神や天使、精霊や魔物、魔人はその100倍といわれている。

そのため、人間の中でも魔力が高い者はギルドとよばれる組織に属する。

そしてギルドの頂点といわれる“聖光の守護者”は、いつしか誰もが憧れる存在になった。

7年前の第二次世界大戦で活躍した8人の英雄が“聖光の守護者”に所属していたからだ。

そしてこれは“聖光の守護者”に憧れた者たちと力が全ての世界に泣いた少年の出会いの物語りである。

最強の魔術師（前書き）

王道物ですが、書いてみたくなったので書いてみました！笑

最強の魔術師

人が集まる城下町。

そこにある見上げるほどの大きな建物。

その前に人が一人立っていた。

その人物は漆黒のコートを身に纏っている。

建物はまるで城のようだ。

しかし、この世界ではお城は一つしかない。

それはここ、王都【セイルーン】にある『シンオウジョウ新王城』である。

だが、この建物は『新王城』ではない。

門番もいなく、建物の入り口の上の看板には“聖光の守護者”と大きく書かれている。

コートの人物は、扉を開けて中に入った。

建物内は人で混雑しており、屈強そうな人たちがたくさんいる。

コートの人物が人だかりを避け、建物の中央にあるカウンターのよ
うな場所まで歩いていく。

今までガヤガヤとうるさかった建物内も、その漆黒のコートを見た

者から声が聞こえなくなっていく。

カウンターに着く頃には、建物内はシーンと静まりかえっていた。

「・・・すみません」

コートの人物がカウンターにいた女性に声をかけた。

この建物の受付をしているのだろうか。

しかし、その女性も漆黒のコートを見た途端に固まってしまい、声も出せずにいた。

「あのっ」

固まっていた女性が反応しなかったので、コートの人物はもう一度女性に声をかけた。

「あ・・・はいっ」

今度は反応出来た。

それほど大きな声だったのだろう。

受付の女性は慌てながらも続ける。

「えっと、任務の報告ですね？」

で・・・では、ギルドカードの提示をお願いいたします。」

コートの人物は言われたとおり、懐から黒いカードを出して、女性に渡した。

「確認いたしました。お疲れ様です。」

「ありがとう」

そう言って、コートの人物はカウンター奥にある扉に入っていった。

バタンツ

と扉を閉めると、コートの人物は深く被っていたフードを取った。

肩まである黒い髪に黒い瞳。

男とも女とも言える容姿で、身長は165cm程だろうか、まだ幼さが残る感じであった。

「あんのジジイ・・・絶対許さねえ」

声は女性のような感じだが、口調からして男のようだ。

そしてその少年は、ぶつぶつと何か言いながら目的の扉へと向かって行った。

少年が向かった扉の上には“ギルドマスター”と書かれたプレートが掲げられていた。

「やっとついたか」

コンコン

そう言いながら、その扉を2回ノックした。

「入」どつがあああん」

返事が帰ってくる前に、少年は魔法で扉を破壊した。

いや、扉だけではない。

扉の向こうの部屋は、跡形もなく吹き飛んでいた。

ガラッ

焦げ跡が残る部屋．．．いや、もう部屋ではないが．．．その瓦礫の下から這い出るように誰が出てきた。

「ジジイが持ってきた今日の任務．．．資料と魔物の数が全然違うじゃねーか！」

部屋に入ってきた．．．もとい扉を破壊した少年は、今まさに死んでしまうほどの傷を負った老人に向かって怒鳴りつけるように言っ

た。

「全然つて、お前にとってはさほど変わらんじやろつが！」

「1000と4000のどこが変わらねえんだよ」

そう言うと、少年は何やらぶつぶつと唱え始めた。

『全てを破壊する漆黒の闇よ

その悪の力を我のために使え』

「ば．．．ばかもん！」

それは闇属性の上級魔法．．．」

言い終わる前に、少年が手を老人に向けた。

「ギオ・ダークレイズ」

「ギイヤヤヤヤヤ．．．」

男の悲鳴が建物内に響き渡った。

ここには人間に危害を加える者を討伐するために軍隊やギルドと言
うものもある。

軍隊はどんなものか想像できるだろうが、ギルドとは何か？

ギルドは、民間人や政府などからいろいろな依頼を斡旋する機関。“聖光の守護者”や“虹色の鈴”などは世界的にも有名である。

依頼とギルドの登録者は、アルファベットで分けられる。

依頼の難易度が高くなると危険が伴うため、それに見合う者が受けるようにということである。

アルファベットは、上からSSS、SS、S、AAA、AA、A、B、C、D、E、F、Gとなっている。

特に登録者のアルファベットは、ギルドランクと言われている。魔法にもランクがあり、上から、初級魔法、中級魔法、上級魔法、最上級魔法、神級魔法がある。

いつの間にか部屋も元に戻り、老人と少年は向かい合っていた。

「で？」

俺に何か用なのか？

ま、任務なんだろうけどさ」

少年が言う。

「まあ、もう少し待ってくれ、もう一人呼んでおる。」

「もう一人？」

少年がそう言うと、部屋の扉が開いた。

「失礼します。」

入ってきたのは、少年と同じ歳くらいで黄色い髪を短くしている男だった。

「レオ！」

少年が入ってきた人物を見て言った。

レオと言う名前なのだろう。

レオ「アルじゃねえか！」

少年の名前はアルというらしい。

「二人が来たところで、二人に任務を言い渡す。

『漆黒の魔術師』、『雷帝』、お前たちの任務は・・・

フェアリー学園に行ってもらおうことだ。」

「「は!?!」」

二人は理解できずにポカーンとしていた。

ちなみに、『漆黒の魔術師』はアルのこと、『雷帝』はレオのことである。

ギルドランクがS以上の者は、二つ名がつけられる。

二つ名持ちは、世界でも数人しかいなく、世界中の人々からは英雄として扱われる。

ポカーンとしている二人を無視して、ギルドマスターが続ける。

「だから、学園に通ってもらおう！」

レオ「なんで今さら学園なんて・・・」

レオは嫌そうな顔をしながら言った。

それもそのはずである。

二つ名持ちということとは、ギルドランクは二人共S以上なのだ。学園の教師のほとんどはAAランクと言われている。

つまり二人とも教師に教わることなんてないのだ。むしろ教えられるだろう。

しかもレオは『雷帝』である。

二つ名に『帝』がつくのはSSランクの者だけ。

SSランクは世界でも20人いるかどうかである。

ちなみにSSSランクは世界に一人しかいない。

現SSSランクは『漆黒の魔術師』である。

つまりアルこと、アルフェイトだ。

この二人に学園に行くことの意味があるとは思えないのだが、

アル「・・・護衛か？」

この一言にレオは思いついたように

レオ「フェアリー学園といえば、十貴族じゅうきぞくが通っている。

そして・・・」

アル「この国の姫もな・・・」

十貴族とは、この世界をにている上流貴族のことで地位でいえば王族の次に偉いと言われている。

たとえ二つ名持ちでも貴族の地位には敵わない。

と言つても、世界最強と言われている『漆黒の魔術師』は王族と同じ権限があるし、『帝』の名を持つレオは上流貴族と同じ地位があるのだが・・・

まあ、この二人は例外である。

しかし、

アル「そういうことなら仕方ないな」

レオ「総帝様がそう言うなら、俺もお供しますよ」

総帝とは、アルのもう一つの二つ名である。

『帝』とは世界に8人いて、その『帝』たちのことを八帝という。総帝とは、ほかの7名の帝をまとめる者につけられる名でもある。

ほかの七帝は、雷帝、炎帝、氷帝、風帝、土帝、闇帝、光帝、となっている。

八帝は全員“聖光の守護者”に所属している。

そんなこんなで？二人はフェアリー学園に通うことになった。

最強の魔術師（後書き）

これから頑張ります！笑

初日（前書き）

とりあえず2章続けて書きました。

初日

小鳥のさえずりが聞こえるような静かな森の中にアルの家があった。

アル「ふぁ．．．寝みい〜」

アルは欠伸びながらも顔を洗うため洗面所に向かった。

「〜」

すると突然携帯が鳴った。

「もしもし．．．」

「アルか？」

わしじゃ、クロノスじゃ」

クロノスとは、“聖光の守護者”総司令・ギルドマスターだ。

クロノス「昨日言い忘れたんじゃが．．．」

アル「なんだよ？」

クロノス「今日から学園に編入してくれ！
それじゃ〜」

ツー・・・ツー・・・

アル「あいつ・・・切りやがった。」

アルは慌ててクロノスにかけ直した。

クロノス「な・・・なんじゃ？」

クロノスは何かに怯えているようだ。

アル「いきなり過ぎだろ。

正体とかどうすんだよ！」

確かにアルの正体が普通の生徒にバレるのはまずい。

クロノス「別にどっちでもよい。」

アル「はあ!?!」

クロノス「お前の好きにしろ。」

アル「はあ．．．わかったよ。
で、何時に行けばいいんだ？」

現在 8時50分。

クロノス「9時じゃ！
じゃ〜そついうことで。」

ツィ．．．ツィ．．．

「ってヴォオオオケがああ?!?!」

急いで支度をし、『転移』と言って学園に向かった。

『転移』とは上級魔法の一つで、自分が行ったことのある場所に瞬間移動のように一瞬でたどり着ける魔法。

アルはフェアリー学園には行ったことはなかったが、フェアリー学

園がある街には何度か行ったことがあるため、学園の近くに転移した。

ここフェアリー魔法学園は、生徒数2300人、教師は200人、総勢2500人がいる。

敷地も半日かけてやっと全部回れるほどの大きさだ。

とにかく全てにおいて馬鹿でかい。

まるでお城のような感じで、綺麗だ。

そこへ一人の少年が現れた。

アル「一応間に合ったか・・・」

「遅いぞ、アル。」

そう言ってアルに近いてきたのは、レオだった。

アル「さっきジジイに聞いたんだよ。」

レオ「俺は昨日聞いたけどなあ・・・」

ブチッ

アル「さあ、レオ・・・確か最初に学園長の所に行くんだっただね」

アルがこの世のものとは思えないほどの素晴らしい笑顔で言った。

レオ「あ・・・ああ」

アル「じゃ〜早く行こう」

レオ（確かこここの学園長って、マスターの弟だったな・・・）

御愁傷様と思いながら、レオはアルの後を追いかけた。

そんなこんなで学園長室の前にたどり着いた二人は、コンコンと扉をノックした。

すると中から威厳がある声で、

「どう「ドツガアアアアン!!」」

あれ？

どこかで見たような光景だな・・・と思いながらも、アルは気にしないことにした。

もちろん、みなさんはわかっていると思うが、部屋はまたもや跡形もなく吹き飛んでいた。

「初めまして。

『漆黒の魔術師』様、『雷帝』様。

私が此所の学園長をしているグラン・シュピッツです。」

あれだけ高密度の魔法を結界で防いだのだろうか。

平然と部屋の中央に立っている。

グラン「兄から聞いていた通り、無茶をなさる。」

これには魔法を打ったアルも、それを見ていたレオも驚いていた。

レオ「手加減していたとはいえ、アルの魔法を防いだ・・・」

アル「これではジジイも形無しだな」

それぞれ適当な挨拶を済ませ、グランの切れ長な目が二人を見据える。

グラン「君たちのことは兄から聞いている。

その歳で大したものだ。」

レオ「いや、まあどうも」

グラン「さて、本題に入ろう」

急に引き締められた空気にレオは姿勢を正す。

アルはそのままだったが・・・

「君たちの任務は、私には詳しく話されていない。

私が君たちにしてやれることは学園内でのサポートだけ。

ただし、君たちの正体を知っているのは私だけだ。」

サポートにも限界があると言いたいのだろう。

「とりあえず、君たちは特待生という形で編入させる。

学園内の施設は好きに使えるだろう。

寮も用意させてもらった。

ちなみに正体は？」

レオ「できるだけ隠したいですね。」

グラン「そうか。

ではこれを」

そう言ってグランはカードのような物を二人に差し出した。

アル「ギルド登録証か」

グラン「はい。」

この学園では、実習でギルドの任務を受けることもあります。

その時にはギルドカードの提示をしなければなりませんので、こちらで偽造カードを作らせていただきました。

ちなみにランクは、Aランクにしておりますがよろしかったですか？」

アル「ああ、それでいい」

レオ「でも、学生でAランクは高すぎるんじゃない？」

グラン「この学園の生徒会長は、Aランクですよ」

レオ「へえ、学生の割には見込みのあるやつもいるんだな」

グラン「とりあえず、これでよろしかったかな？」

アル「ああ」

その時、またもや直されていた扉をノックする音が聞こえた。

グランが「どうぞ」というと、見た感じ若そうな女性が入ってきた。

「失礼します」

その女性が部屋の中央に来たところで、グランが紹介する。

グラン「彼女が君たちの担任になる、セレナ・シュピッツだ。」

レオ「シュピッツ?」

そう、シュピッツとはギルドマスターと学園長と同じ名である。

グラン「私の娘だ。」

セレナ「私があなたたちの担任になる、セレナ・シュピッツよ。よろしくね。」

これにはさすがのアルも驚いた。

似てない。

非情に似ていない。

学園長は、白髪をオールバックにし、ゴツゴツした感じだ。

お世辞でもかっこいいとはいえない。

しかし、娘だというこの女性は銀髪を美しく見せるようなストレート、誰が見ても美人だと言っほどの容姿だ。

二人が固まっていると、何やら雑音が聞こえてくる。

グラン「私も・・・昔はかっこよかった・・・」

二人、いや、三人はそれを無視して挨拶を交わしあった。

それにしてもこのセレナは、若いながらも相当な実力を持っているのだろう。

受け持っているクラスは、Sクラスと言っていた。

学園とはいえ、Sクラスはその学園の実力者が集まる。

特待生のアルやレオもSクラスに入る。

おそらく、十貴族や王族もSクラスにいるはずだ。

そこの担任をしているんだ。

二つ名持ちでも不思議ではないが・・・

そんなことを考えていたアルは、セレナが話しかけているのを無視するかたちになっていた。

セレナ（アルくんは気難しそうね・・・）

勝手にそんなことを思われている。

セレナはある教室の前で立ち止まる。

セレナ「では、私が呼んだら入ってきてください」

セレナはアルたちの返事を待たずに教室の中に入っていった。

レオ「学園なんて初めてだから緊張するなあ」

アル「全然そんな風には見えないけどな」

レオ「ははっ！！言ってみただけ」

アルたちがそんなことを話している時、教室では・・・

セレナ「みなさん、静かにしてください。
今日は転校生がいるので紹介します」

すると、セレナのその言葉に沈黙していた生徒たちの雰囲気は一気に上がった。

「先生！男ですか？女ですか？」

セレナ「お前はなにお決まりのセリフを言ってるんだ！
二人とも男だよ」

「二人いるんですか？」

セレナ「ああ」

「イケメンですか??」

セレナ「さあね。

自分たちの目で確認しろ。

入っていいぞー」

教室の中からセレナの声が聞こえた。

レオ「入っていいってさ」

アル「だな。行くか」

二人が教室に入ると、物凄い音量の歓声が主に女子から聞こえる。

セレナ「えー静かに!!!」

では二人とも自己紹介してください」

その一言で教室がシーンとなった。

レオ「じゃーまずは俺から」

微笑みつつレオが前に出た。

レオ「俺はレオ・克蘭ツ。

属性は雷と土です。

よろしく」

レオの自己紹介にクラス全体が湧いた。

二属性持ちは学生ではなかなかいないからだ。

アル「んじゃ、次は俺だな。

俺はアルフェイト。アルって呼んでくれ。

属性は闇と火と氷だ。

まあよろしくな」

最後にアルが笑顔を見せたのでまた女子から歓声上がる。

もちろん男子も三属性という稀な存在に声を上げた。

二人の自己紹介が終わった時にちょうどチャイムが鳴った。

セレナ「次は魔武器精製をやるから、闘技場に集合してくれ」

セレナのその言葉でアルたちは移動することにした。

その時、アルの後ろ姿を凝視する少女がいた。

が、アルはその視線に気づいてはいたが、気づいてないふりをして闘技場に向かった。

初日（後書き）

どこかで見たとような内容になってしまった。。。

同じ設定でも僕にしか書けない話にしてやる！笑

魔武器精製（前書き）

本日3章目の更新！

今回は魔武器精製の話です。

どんな魔武器にしようかなあ〜。。。。

魔武器精製

場所は変わって現在は闘技場。

セレナ「よし！みんないるな。

さつきも言ったが、今からみんなには魔武器を精製してもらおう」

セレナがそう言うのと生徒たちから歓声が上がる。

セレナ「魔武器はこの魔鉱石に魔力を流せば作れる。

ちなみに形を故意に決めることも可能だが、かなり魔力をつかうから普通に作ったほうが楽だぞ！！

魔武器の色は指定しないかぎり自分の属性の色になる。

魔武器は作ったら名前を決めないと能力がわからないからな。

説明は以上だ。

適当に5〜6人のグループになって魔鉱石を取りにこい。」

セレナがそこまで言うと、みんなは仲の良い人同士でグループをつくりだした。

さすがにアルとレオは初対面で誘うのは抵抗があるため、人数の少ないグループが出来るのを待っていた。

「アル様！！」

すると誰かがアルの名前を呼んだ。

アル「ティアラか・・・」

名前はティアラというらしい。

ティアラ「一緒にやりませんか？」

アル「俺たちは別に構わないが・・・」

アルはそう言うと、ティアラの後ろにいる人たちに視線を向けた。

ティアラ「みなさん、大丈夫でしょうか？」

「・・・・・・・・私は・・・別にいい・・・・・・・・よ・・・」

「もちろん、俺は「私も全然いいよ!!」」

一人可哀想な奴がいたが、3人の許可を得たのでアルとレオはそのグループに入った。

レオ「さてと、とりあえずみんなの名前教えてくれるかな？」

そう言ってレオは3人に話しかけた。

「・・・私・・・ミラ・・・アル、レオ・・・よろ・・・」

ミラは背が低めで、顔も幼さが残る感じだが、顔は可愛く髪は紫色のショートカットだ。

「私はリオ!!よろしく」

元気に挨拶してきたのは、リオというらしい。

リオは長い青色の髪をポニーテールにしており、可愛いというよりは美人な顔つきだった。

ティアラ「私のことは知っているとは思いますが、ティアラです。よろしく願いいたします。」

ティアラは気品溢れる口調と腰まである綺麗な金髪が特長の女の子だ。

リオ「これで全員かな」

「ちょっと待てよーーーーー!!!」

リオがそう言うと、泣きそうな顔で割り込んできた男がいた。

リオ「あら、いたの？」

完全にいじられ役のようだが、アルは少しこの男が可哀想になってきた。

「俺の名前はグリード!!」

二人とも二属性以上なん「グリード、早く魔鉱石取ってきて!!」

そう言ったのはリオだ。

ミラ「.....早く.....」

二人にそう言われ、仕方なくグリードは全員分の魔鉱石をとぼとぼと取りに行った。

グリードは緑色の髪を短くしていて、好青年のような感じなのだが、どうやらここではいじられキャラのようであるもグリードには厳しくしようと心に誓った。

グリードが魔鉱石を取りに行っている間、アルは魔武器について話していた。

アル「3人は武器指定するのか？」

とアルが聞いてみると。

ティアラ「私はしませんわ」

リオ「私も!!」

ミラ「．．．私．．．も．．．．．アルは．．．？」

アル「俺は指定する」

リオ「レオ．．．君は？」

レオ「レオでいいよ。」

俺もしようかと思ってる」

ティアラ「どんなのを造られるんですか？」

アル「秘密だ」

レオ「見てからのお楽しみみてことで」

そんな話をしていると、魔鉱石を持ったグリードが帰ってきた。アルたち6人は全員同時に魔武器を精製することにした。

そして全員が魔鉱石に魔力を流した。

ティアラは純白の弓矢。

リオは青色の双剣。

ミラは黒い双銃。

グリードは緑色の大剣。

レオは黄色い槍。

アルは……何も持っていなかった。

リオ「え？

アルの武器は？」

ミラ「……失敗……？」

みんながまじまじとアルの方を見ていた。

アル「今見せる」

アルがそういうと、目があけられないほどの強い光がアルを包み込んだ。

しかしレオだけは、しっかりとアルの姿を見ていた。

しばらくしてから光が収まりティアラたちが目を開けると、2mはある漆黒の翼を生やしたアルが立っていた。

その姿はまるで悪魔のようであったが、漆黒の羽であるにもかかわらず、キラキラと光っていて非常に美しく見える。

その光景にはクラス中がアルに見とれていたのである。

アル「よし！！イメージ通りだな。

名前はシンプルに“黒翼”^{コクヨク}だな。

能力は……普通の魔力を流すと硬質化で、属性付加すると属性によって能力が変わるか、なかなか良いものをつくったな」

アルが満足していると、リオが質問してきた。

リオ「アル！なんでそんな凄い魔武器つくれるの！？能力だつて凄いし」

アル「ああ、俺は魔力が多いからな。だからじゃないのか？」

てか、お前たちも早く名前つけたほうがいいんじゃないか？」

アルのその言葉で、名前をつけるのを忘れてたのをみんな思い出した。

アルはみんなの持っている魔武器を見て

アル「ティアラは光で、リオは水、ミラは闇、グリードは風属性か。名前は決まったか？」

リオ「うん！

私のは“水刃”^{スイジン}で能力は、魔力を流すことで高密度の水を飛ばせる」

ミラ「・・・私は・・・“霧”^{ミツレ}と“霞”^{カスミ}・・・能力は・・・霧が・・・魔力を込めると剣になって、霞が・・・自動追尾・・・するの」

ティアラ「私のは“白景”^{ヒヤッケイ}です。

能力は、放った矢を操作できることと込めた魔力によって同時に射てる矢の数が変わるらしいです」

グリード「俺の魔武器は“空牙^{クウガ}”だ。

能力は風を纏わせることで大きさや数が変わる鎌鼬を放てる」

アル「みんないい能力だな。

特にミラのやつは凄いな!！」

そついうとミラがトコトコ近づいてきて

ミラ「・・・褒めて・・・」

とつのでアルはミラの頭を撫でてあげた。

ミラ「・・・うにゃ・・・」

と嬉しそうに目を細めた。

その光景を見ていたティアラとリオが

((いいなあ))

と黙って見ていた。

グリード「そういえばレオの魔武器は？」

魔武器精製（後書き）

頑張りました。。。

1日でこんなに書くなんて・・・笑

あ、Peace-of-Destinyという小説も書いてますのでそちらも良かったら見てみてください

そっちは今日更新できないなあ・・・泣

侮辱と友達（前書き）

この話のイラストも描きたいなあ。
でもどうやって載せれば．．．笑

あ、感想いただけると嬉しいですよね。。。
作者は単純なのでアホみたいに喜びます。

え？

いや．．．強制しているわけでは．．．笑
でも待ってます 笑

侮辱と友達

アル「（ボルト家か．．．感ずかれたか？）おまえ誰だ？」

アルは少し焦っていたが、冷静に対応した。

「な！君は僕のことを知らないのか！？」

十貴族のボルト家のロイだ！！」

アル「はいはい、わかったわかった。

それで、何の用だ？」

鬱陶しいのと焦っているので、アルはかなり雑な対応になりだした。

ロイ「き、君は！

．．．まあいい、率直に言おう。

そんな“汚れた”やつなんかと一緒にいないで僕の仲間にならないかい？」

ロイはミラに視線を送りながらニヤニヤした表情で言った。

その言葉にミラは俯き震えアルの着ているローブを強く握り、ティアラとリオはロイを睨んでいた。

しかし、アルはその二人よりも明らかに怒っていた。

アル「てめえ、今なんだった？」

普段のアルからは想像できないほどの低い声で言った。

ロイ「何を怒っているんだい？」

僕は事実を言っただけさ、その女は貴族でもなんでもない。汚ないやり方でルージユ家に取り入った薄汚い女なんだよ」

そこまで言ったロイに対して、アルはあり得ないほどの殺気を放った。

レオ(こういう時、鈍い奴は本当に羨ましいな・・・)

あの殺気を感じることができないなんて・・・)

レオの額からは汗が滲み出てきていた。

そしてもう一人・・・

セレナ(な、なんだあの異常な殺気は・・・)

あいつ・・・本当に学生か？)

セレナは今にも倒れそうだった。

しかし、生徒の殺気ぐらいで教師が倒れるわけにはいかないと思っ

たのか、ギリギリのところまで踏ん張っていた。

殺気は無意味だと思ったのか、アルは殺気を消した。

アル「ミラ、俺はお前を友達だと思ってる。
だからそんな不安そうな顔するな」

先程まで殺気を放っていたとは思えないほど優しく、穏やかな表情でミラを見ていた。

アル「怖かったろ？」

あんな奴でも地位は高いから下手に刺激したら大変だからな・・・

でも、俺が今日から自由にしてやる」

そういうとミラは、アルの背中に手を回して抱きしめ、アルの胸に顔を押し付けて静かに泣いた。

アルはそんなミラの頭を撫でながらロイを睨み付ける。

アル「弱いくせに調子に乗るなよバカ貴族！

俺が今日、お前の弱さを教えてやるから放課後に俺と闘え！！」

ロイ「ふん！」

何故僕がわざわざ君なんかと闘わなきゃいけないんだい？」

アル「へえ、逃げるのか？」

十貴族の息子が俺みたいな庶民に怯えてるのか？
最近のお坊ちゃんも臆病なんだな」

そうアルが挑発すると

ロイ「僕が臆病だと！！？

いいだろう、闘ってあげるよ！！

今の発言を後悔させてやる！！」

そう怒鳴ると、ロイはグループの所に帰っていった。

ロイがいなくなるとリオが話しかけてきた。

リオ「ちよつとアル！！

大丈夫なの？」

アル「何が？」

リオ「ロイにあんなこと言って。

ロイはああ見えて学年2位の實力なんだよ？」

アル「じゃあ逆に聞くが、お前たちはミラがあのままでもいいと思ってるのか？」

リオ・ティアラ「そんなことない（です）！！」

アルがそう聞くと二人は涙目で答えた。

リオ「私たちだってミラを助けてあげたいわよ！
あいつを倒してミラに酷いことをするのをやめさせたい！！

でも．．．でも私じゃあいつに勝てなかったのよ．．．」

リオとティアラは涙を流し、悔しそうに言った。

そんな二人を見たアルは

アル「すまない．．．聞くべきじゃなかったな。

心配するな、明日からあいつは俺たちに何もしなくなる」

ティアラ「アル様にまかせておけば大丈夫ですね。
さあ、先生の所に戻りましょう」

そういふと6人はセレナの所に戻っていった。

侮辱と友達（後書き）

眠い．．．。

でも更新できました！

おもしろいかわかりませんが、この作品を見てくださってるみなさん．．．ありがとうございます！！

そしてこれからもよろしくです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9249y/>

Non...daily life

2011年11月28日06時52分発行